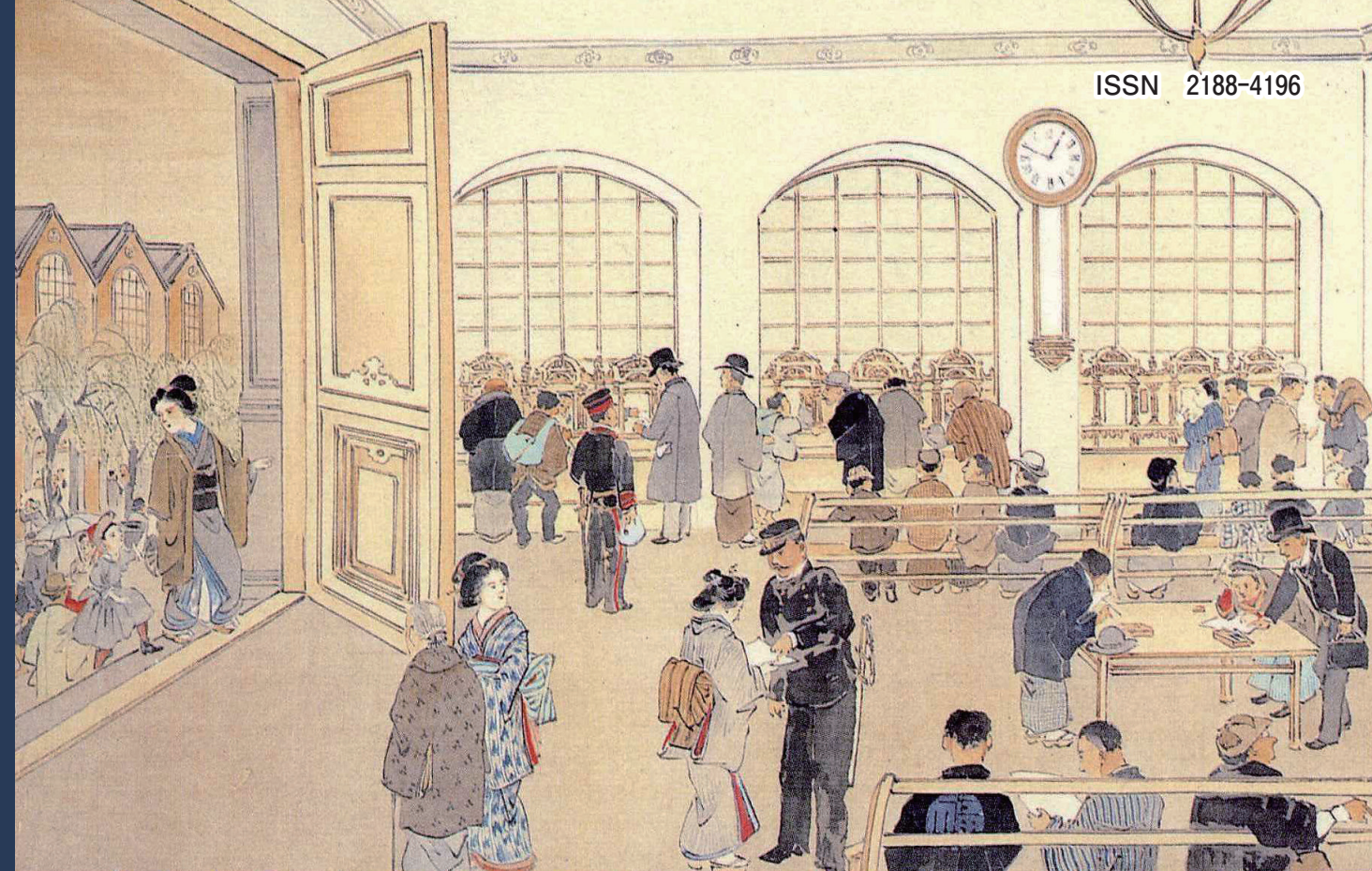


郵政博物館

研究紀要

ISSN 2188-4196



郵政歴史文化研究会編

郵政博物館 研究紀要

平成30年度 第10号 (2019年3月)

平成30年度 第10号 (2019年3月)

ISSN 2188-4196

郵政博物館 研究紀要 第10号 (2019年3月)



公益財団法人通信文化協会

表紙解説

『郵便現業絵巻』（久保田^{ペイセン}米僊 郵政博物館収蔵）⁽¹⁾

第五図 東京郵便電信局の郵便為替貯金窓口ロビー

1875年に取り扱いが開始された郵便為替と郵便貯金の窓口ロビー。和装洋装の老若男女でにぎわう様子が描かれている。掛け時計の示す時刻は12時50分で、第四図より6分ほど進んでいるのが興味深い。窓口の後ろでは、左腰にサーベルをさした警官が見張りにあたっている。郵便創業当初、この黒ズボン脇の赤線は郵便外務員の制服にも採用されていた。しかし1872年、東京府より邏卒と紛らわしいとの指摘があったため線幅が改められ、1882年には完全に取り除かれた。

第六図 郵便物の郵便馬車への搭載作業

二頭立ての郵便馬車に郵袋が搭載される様子が躍動的に描かれている。膨らんだ郵袋からはずっしりとした郵便物の重みが伝わってくる。本図に基づく石版画⁽²⁾が1893年発行の『風俗画報 62』に掲載されているが、その図解には「吾曹か発送し或は領収するはがき一葉といへども実に容易ならざる手数を経るものたるを知らるべし」「此れ吾曹か此の明治の聖世に生れ遇ひたるの至幸なり」と、郵便事業のありがたみが説かれている。

-
- 1 1893年、アメリカ合衆国シカゴ市で開催された「コロンブス世界博覧会」に出品するために制作された作品。詳細は『郵政博物館 研究紀要』（第8号、2017年）を参照。
 - 2 この挿図右上には「金僊写」と書き込まれている。久保田金僊は本絵巻の制作者とされる米僊の息子。本絵巻および挿図については、父子の帰属に問題が残るとの指摘もある（中村日出男『郵便現業絵図Ⅲ（久保田金僊筆）』、私家版、2011年）。